

2002年度卒業論文要旨

ミコノインターナショナルの活動から考える国際協力  
——「脱開発」論再考——

安藤 素子

国際協力への関心が世界的に高まっているが、従来型の政府主体の国家間援助に加えて、地元根づいたNGO活動が注目を集めている。その一事例として、ケニア共和国ガリッサ県に展開する日本のNGO、ミコノインターナショナルの活動を調査した。本論文の目的は、活動地の地域像を背景に、国際協力活動を具体的側面からとらえ、何が見えてくるのかを探るとともに、「脱開発」論の視点を検討することである。

筆者は、同NGOの現地活動に2001年3月末から約6ヶ月間参加させて頂いた。現地では、主に家事全般や英和文翻訳などの内業を手伝いながら、プロジェクト現場を見学したり、ピアニカの指導に孤児院を訪れた。本論文は、これらの体験や聞き取り、収集資料に加え、帰国後の元NGOスタッフへの聞き取りをもとに作成した。

筆者が現地で実際に見てきた主な活動は、建築(診療所建設)・保健医療(医療巡回)・教育分野(奨学金支援)の3分野である。建築分野においては、活動拠点地から南方約200キロに位置するイジャラ地区の診療所建設を視察した。同NGO設立当初から活動の中心である建築分野において、民族的統一性の無さから生じる建築活動の難しさや政府への医療施設引渡し後の運営問題

などの現状をまとめた。保健医療分野では、1997～8年にかけてエルニーニョ現象の影響により洪水被害を受けた当地域に対し、支援が開始された医療巡回を取り上げた。医療巡回の経緯や具体的内容とその意義、また筆者が巡回地で感じた住民の様子などを述べる。教育分野においては、奨学金支援の仲介役を担う同NGOの活動意義を考察し、当地域の国内における教育水準の低さや、男性優位にあるイスラム社会という背景を挙げた。

これらの活動からみえる現状と課題をまとめるとともに、現在の国際協力に対する視点のひとつとして「脱開発」の視点を取り上げた。「脱開発」論の中から、伝統に従って生きる脱経済社会・あらゆる援助の批判・経済的發展を目指す国際援助の危険性という3者の主張を、同NGO活動の上述3分野からそれぞれ検討し、活動の意義を考察した。結論として、国家や民族的背景が生む課題自体には働きかけないことで、根本的課題の解消には直接繋がらないかもしれないが、国や民族という大きなレベルを飛び越えて、今、目の前にいるその人に直接プラスとなる支援を提供するというNGO活動は、現実に即した、確実な支援であると筆者は考えた。

照射される大久保——フィールドワーク試論——

飯田 真実子

大久保はエスニックタウンとして広く知られるようになっていく。そうした変化の裏では、人々のどのような活動がどのように繰り広げられているのか。本論文は、大久保の都市景観の変化をより詳しく探ることに加え、大久保を舞台に活動している様々な団体や個人といった主体に焦点を当てた。その活動への参与観察と聞き取り調査から、そこで活動する人々の街に対する関わり方、活動する人々相互の関わりを観察した。

大久保には、個人住宅・アパート・マンション、

商店、専門学校・日本語学校、ラブホテル、旅館、エスニック・ビジネスを営む店舗が混在している。多数のエスニック・ビジネスが、商店街においてもビル内部においても営まれている。その街の景観の変遷を追うために、住宅地図を用い、大久保地区の一部を抜粋し、建築物、又はビルの内部店舗などの変遷を調べた。大久保では、歌舞伎町の影響、外国人居住者の増加、エスニック・ビジネスの増大などの影響を受けて、個人宅・アパート・マンション、商店、学校、ラブホテル、エス